

第33期第3回京都市社会教育委員会議の様様を マナビィがレポート！

平成30年3月22日（木）京都市右京中央図書館で、第33期京都市社会教育委員会議の第3回目となる会議が開かれました。「京都市子ども読書活動推進計画及び京都市図書館」を中心とした会議の様様をわたくしマナビィがレポートします！

■ 出席委員（17名のうち14名）※五十音順

大八木 淳史 委員，齊藤 修 委員，佐伯 久子 委員，鈴鹿 可奈子 委員
千賀 修 委員，園部 晋吾 委員，瀧野 早苗 委員，橋元 信一 委員，
平尾 和正 委員，本郷 真紹 委員，柁木 良子 委員，森 清顕 委員，
安成 哲三 委員，吉川 左紀子 委員



第33期第3回社会教育委員会議次第

開 会

1 議 事

- (1) 京都市子ども読書活動推進計画及び京都市図書館について
- (2) 平成30年度「指定都市社会教育委員連絡協議会」の出席者について

2 報 告

- (1) 「京（みやこ）まナビミーティング」について
- (2) 平成30年度「教育予算（案）の概要」について
- (3) 平成30年度「学校教育の重点」について

3 主催事業及び刊行物の案内・説明

閉 会

■ 第33期委員の自己紹介

○ 安成 哲三 委員（総合地球環境学研究所所長）

もう、長く委員を務めさせていただいておりますが、大学協働利用機関法人の人間文化研究機構というところの総合地球環境学研究所の所長をしています安成です。どうぞよろしくお願ひします。

■ 議事 - 1 京都市子ども読書活動推進計画及び京都市図書館について

○ 事務局（下山 学校地域協働推進課長）

配布資料 [第3次京都子どもの読書活動推進について](#)
[第3次京都市子どもの読書活動推進計画リーフレット](#)
[第3次京都市子どもの読書活動推進計画冊子](#)

<第3次京都市子ども読書活動推進計画の概要と次期推進計画の策定について>

- ・ 本市では「第1次京都市子ども読書活動推進計画（H16）」の策定以来、国の計画に準じて5年毎に計画を見直し、現在は「第3次京都市子ども読書活動推進計画」に基づき、家庭・地域・学校等との連携による子どもの読書活動の推進に向けた様々な取組を推進しているところです。
- ・ 1か月に本を一冊も読まなかった子どもの割合を「不読率」と呼んでいますが、不読率は近年、全国的に小中学生では1.5割以下で横ばいに推移しているものの、高校生では増加傾向にあり平成28年度調査では約6割に達しています。
※「不読率」などの各種データ解説（中略：詳細は上記配布資料を参照）
※「第3次京都市子ども読書活動推進計画」取組内容説明（中略：詳細は上記配布資料を参照）
- ・ 現行の読書活動推進計画は平成30年度末で終了することから、学識経験者や読書団体、保護者等が参画する「京都市子ども読書活動推進計画策定会議」を設置し、新たな取組の指針となる「第4次読書活動推進計画」の策定を予定しています。
- ・ 策定にあたっては国の次期子ども読書活動推進計画の動向や、読書活動の実態把握のため児童や保護者を対象としたアンケート調査、パブリックコメントによる市民意見も踏まえ、子どもの読書を巡る課題解決に、社会全体で取組を推進するための計画策定を進める予定です。

○ 事務局（松野 生涯学習部担当課長）

配布資料 [京都市立図書館の取組等について（詳細）](#)
[京都市立図書館の取組等について（画像）](#)

<京都市の図書館について>

- ・ 本市では身近で利用していただきやすい図書館を目指し、徒歩圏内の半径2km以内を設置基準として図書館を設置してきました。
- ・ 図書館の利便性向上等に関する取組として、インターネットによる全図書館の蔵書検索や予約、各館から全館の図書を取り寄せ・返却できるシステムの構築などの一体的な事業運営の実施や、開館時間の拡大などを実施しています。
- ・ 蔵書整理等で不用となった図書を市民へ無償譲渡する取組や、宇治市立・大津市立図書館との相互利用、市立芸術大学附属図書館及び京都府立図書館との資料の相互貸借なども実施しています。
- ・ 障害のある方には、来館が困難な方を対象に図書の自宅配送サービスを実施しています。
- ・ 学校連携の取組として、学校への団体貸出の推進や学校司書等を対象とした研修会の実施、調べ学習用の推薦図書リストの作成なども行っています。
- ・ 市民の読書活動を推進するため、司書が推薦図書を紹介する「京都市図書館司書のイチオシ」の実施や、レファレンスサービスの実施や地域性を生かした取り組みなども実施しています。
- ・ 老朽化した施設や設備のメンテナンスや、レファレンスサービスの普及、電子書籍の導入に向けた検討、不読率の高まる中高生に向けた取組の充実、超高齢社会に対応する図書館サービスの実施などが今後の課題であると認識しています。

○ 安成 哲三 委員（総合地球環境学研究所所長）

図書館で最も大切なことは、より多くの図書を収集することだと思います。利用者増のためにイベントを開催するなど様々な取組をされていますが、「できるだけ多くの本を購入し市民に提供する」、「市民が利用しやすい環境を可能な限り整える」というのが肝要だと思います。



本日の資料には無かったように思いますが、利用者の年齢層や世代別の利用者数は把握されていますか。ご高齢の方が図書館をよく利用しているように思いますが、図書館の主な利用者がどういった層なのかを把握することが、今後の図書館の利用増進を図るうえで重要だと思います。私も高齢者の一人ですが、年齢を重ねても何かを知りたいという気持ちは強くあるもので、色んな本を読みたいとの意欲を多くの高齢者が持っています。日本では、読書離れが問題化していますが、書籍自体は増えていますが、高価にもなっており購入し難いので図書館を利用したいというニーズは本当に多い。そうした声には是非答えて欲しい。

それから、様々な図書館との相互利用を進めています。京都市立学校の図書室や大学図書館との図書情報の共有は行っていますか。限られた予算の中で購入した本を有効に活用するシステムは充実させる方が良く思いますので、そうした連携にはどんどん取り組んでもらいたいです。

不読率の件ですが、特に高校生で低くなるということに対しては、読書活動推進計画などを定めてその枠の中で取り組んでも難しいのではないかと思います。学校の仕組みそのものを見直す必要があるのではないかと考えています。高校生になるとみんな受験勉強や高校のカリキュラムの中で本を読む時間を作ることが難しくなっているのではないのでしょうか。

もちろん学校教育の中で、図書室などで調べ物をする必要性は生じるはずだと思います。いくらネットで様々な情報を調べられるようになったといっても、ネット上から得られる情報は限定的で、学校の図書室や図書館の果たす役割は非常に大きいと思います。そうした意味で、不読率の問題だけに限定し、その改善だけを図るといような取組はナンセンスではないかと思うのです。私自身の経験からいっても、特に高校生の時に色々な本を読むかどうかでその後の人生を左右します。行政も含め社会全体で学校教育を考える中で、不読率の問題は考えるべきだと思います。

○ 事務局（松野 生涯学習部担当課長）

本市では、他都市でみられるような図書購入費の削減といったことはなく、例年、年間約2億円の予算を図書購入費に充て、年間10万冊程度の購入を継続して行っています。

年齢別の利用状況については、図書館に在館して利用される方はご高齢の方が多いのですが、登録者数では30代・40代の方が最も多くなっています。登録者全体の中で占める割合では、50代が9%程度、60代が8%程度、70代以上が8%程度となっており、年齢が上がるごとに登録者数は減る傾向にあります。京都市人口との比較では、50代では11%、60代では13%、70代では18%の方に登録していただいている状況です。

学校との連携では、「団体貸出制度」を設けており、学校に対して「調べ学習用の資料」の貸出と「読書活動用の図書」の貸出の団体貸出制度があります。各図書館で担当する学校を定めており、学校との連携強化を行っています。

○ 齊藤 修 議長（株式会社京都新聞ホールディングス顧問）



図書館に来館して利用されているのは、ご高齢の方がものすごく多いと思う。ただ、来館していなければ図書館を利用していないということではないと思います。京都新聞社の論説委員もよく利用させていただいていますが、図書館にいて図書を閲覧しているのではなく、インターネットで図書を予約し、届いたとの連絡を受けて図書館には本を受け取りにだけ来る、というのが一般的なスタイルです。そうした使い方をされている市民の方も多いのだと思います。

安成委員からご提案のあった、大学図書館との交流・連携などは豊富な図書を有していますので、素晴らしい提案だと思います。是非検討していただければと思います。不読率については、大学生でも半数が本を読まないとの調査結果が出ておりますので本当に難しい問題だと思います。

○ **安成 哲三 委員（総合地球環境学研究所所長）**

大学生の不読率の問題は、肝心の高校生の際に本に親しんでいないことが大きな要因だと思います。

○ **齊藤 修 議長（株式会社京都新聞ホールディングス顧問）**

我々の世代では「図書館に行って勉強をする」「本を借りる」という時代でしたが、現在は、「まちづくり・地域づくりの核としての図書館」や「人と人がつながる場所としての図書館」、「高齢者の居場所としての図書館」など、図書館の果たす役割も多様化していると思いますので、そうした幅広いところからも皆さんにご意見をおうかがいしたいと思います。

○ **鈴鹿 可奈子 委員（株式会社聖護院八ッ橋総本店専務取締役）**



私は読書が好きで在学時は学校図書館をよく利用していましたが、実は公共図書館はこれまで利用したことがありません。ですので、私も図書館の利用率が単純に読書率に比例するものではないと思っています。

議長から大学生の不読率のお話があり、安成先生が高校生の時の習慣の問題だにご指摘されていましたが、その通りだと思います。私も小学生の時、塾ではありましたが毎週読書感想文を提出するような塾に通っていましたので、当時からそのぐらいの頻度では読書をしていました。中学生になり本を読んでいますと両親から「本ばかり読まないで勉強しなさい」と言われるようなこともありました。どうしても文庫本や小説を読んでしまうので、受験勉強するような年齢になりますと読書というのは勉強の時間というよりも娯楽の時間のような感覚でした。

大学でも本を読むことが好きで読書をしている学生もいれば、読書習慣がなくなり本を読むということから離れてしまう学生もいるのだと思います。そうしますと、学校との連携というのが子どもたちに読書習慣を身につけさせるのに必要になってくるのだと思います。私が通っていた小中学校はキリスト教系の学校で礼拝の時間があつたのですが、礼拝が無い日は読書をする時間になっていて、学校教育の中で読書をする時間があつたんですね。そうした時間があるとどういった本でも読むようになりますので、各学校でそうした取組を進めることが必要ではと思います。

また、図書館でこうした十代向けの本のコーナーを設けたり、ブックリサイクルの取組なども行っておられることは、もっと学校を通じてアピールすることも必要なのかなと思います。

○ **本郷 真紹 委員（学校法人立命館理事補佐、立命館大学文学部教授）**



日常的に学生と接していて、高校生の不読率には「時間がなくて読まない」というのと「関心がなくて読まない」という明確に異なる2パターンがあると思っています。「時間がなくて読まない」というのは、大学入試が高校生の一つの学習パターンのモデルになる状況下で、そこで長文読解能力を求めてこなかった責任です。教科書や参考書は読むけれど受験に関係の無い本は読まない。これはよく勉強をする学生にある傾向です。

一方で、「関心がなくて読まない」というのは明らかに習慣の問題で、はっきり申し上げて、小学

生段階でどれだけ本に接したかということが決定的ですね。正直に申し上げて国語に関しては、高校生になってからでは遅い。どれだけ勉強し直しても伸びないですね。国語力に関しては高校や大学教育で補うことは不可能です。ですので、小学校段階でどれだけ読書習慣を身につかせるかが大事なんです。

学校現場では読書習慣を身につけさせるための取組をモジュール化し積極的にこなっていますが、保護者が問題なんです。保護者に書物に対する関心が無ければ、子どもに読書習慣は絶対に身につけません。ですから子どもたちに働きかけるのと同時に保護者に対しても、大人が書物に関心が無ければ子どもにどういった影響を与えるのかを十分に伝えていかなければなりません。学校任せにし、学校が何とかしてほしいと思われているのでは大きな問題です。

もう一点、IT化の功罪というのは必ずあると思います。「本離れ」を促進しているのは間違いなくIT化です。立命館大学でも新しい図書館を設置したところで大変便利になりました。番号を打ち込めば勝手に望む書籍が自動販売機の如く出てくるようになりました。これは、図書の管理と人件費の節約という面では本当に素晴らしいことです。しかし、逆に申しますと皆さんにもご経験があるかと思いますが、書庫に入って自分で本を探す、その時に探していた本とは別に「あっ、こんな本もあるんだ」という気づきが無くなっています。同じように指摘されていることに、電子辞書があります。電子辞書では調べたい項目だけが表示されます。その近辺にある項目が目につくることがありません。

IT化の結果、関心の幅が広がらなくなっている。アナログの意味を子どもたちにも理解させなければ読書離れは進む一方です。全く関心の幅が広がらない、必要最小限のものだけを与えられて満足することになります。

IT化というのは一方でそうした技術を子どもたちに伝えていく必要がありますが、もう一方でアナログの意味を振り返り、デジタルとアナログの住み分けをし、両方を刷り込んでいかなければますます本離れになると思います。大学の授業でも、かつては黒板をノートに書き写すのが当たり前でしたが、近年、電子黒板が導入されますと黒板に記載したことが即座にプリントアウトできますので、講義をしていて学生に「黒板を写せ」と言っても写しません、「プリントアウトしてくれ。黒板を書き写すなんてナンセンスだ」と言ってくる。そういった状況もふまえて、全体を見直したうえで図書館とはどういう機能・役割を果たすべきなのかを検討すべきではないでしょうか。

○ 園部 晋吾 委員 (NPO 法人日本料理アカデミー地域食育委員会委員長、山ばな平八茶屋若主人)



私も図書館を利用したことがありません。だからといって本が嫌いな訳でもありません。自分の性格上、本は借りて返すよりも購入する方なのです。本は自分が読んだ物の履歴として残しておきたい。そして、以前にはどういった本を読んでいたのか分かるようにしておきたいのです。

本郷委員が言われた通りだと思うのですが、小学校段階で本を読むという習慣をつけておかなければならないんだろうなという気がします。私が携わっている食育もまさにそうなんです。どこかで触れるきっかけや気づきを体験しておかないと、後々からはなかなか難しい。

例えば、小学校の夏休みにワークシートの宿題もいいのですが、「図書館に行って何か調べてきなさい」「図書館に行って利用者登録をしてくいなさい」といった宿題を与え、図書館に行かせるということも良いのではないのでしょうか。そうした機会を与えることで図書館では何ができるのか、どんな利用方法があるのかなどに触れる機会になると思います。全くそうした機会がなければ、子どもたちが自分から図書館に行くという習慣には繋がらないのではないかと。どういったものでも良いので、子どもたちが自分から図書館に行くきっかけが必要なのだと思います。

各委員がおっしゃっておられることはまさにその通りだと思いますので、今後の図書館のあり方というのは幅広い範囲で検討してかなければならないと思います。

○ 千賀 修 委員（平成28年度京都市PTA連絡協議会会長）



本郷委員のご指摘通り、「親が読まない子どもも読まない」というのは耳に痛いなと思っています。私は保護者代表としてこの会議に参加していると思っていますので、自分自身も含め深く反省しなければならないなと思います。

子どもがどういったきっかけで本を読み始めるのかを、私も考えたことがあります。先ほどからの話では小学校段階からということが多かったと思いますが、もっと前ではないかと思っています。京都市が始めた「ブックスタート事業」もそうですが、子どもが幼少期の段階で親が寝かし付ける時に一緒に絵本を読んであげたり、子どもが絵本を読んでほしい時に応えてあげることなんかが一番大切なのではないかと考えています。ただ、このご時世、共働きのご家庭が多い中でそうしたことが難しくなっているというのも現実です。

私の子どもが通っている中学校の校区内には、残念ながら図書館は無いんです。先ほどの説明では半径2km以内というのが設置基準とのことでしたが、大人にとっての2kmはそう遠くないかもしれませんが、子どもにとっては割と遠い。小学生だと校区外になり、放課後に立ち寄るといったことはできません。ですので、学校図書室の充実を更に進めていただくことが必要だと思っています。また、放課後は誰でも図書室で遊べるよ、本を読んで良いよという風にしてもらえればすごく良いなと思います。実践されている小学校もありますが、そうしたことを拡充してもらいたいなと思いました。

本との出会いは絵本が最初だと思うのですが、子どもは絵本を読んでいるときに「次のページはどうなるのかなあ」と想像力を育てているのだと思います。その想像力が育まれてこそ、その後にマンガであっても活字であっても楽しめるのだと思います。そういった観点で考えますと家の中に本があることが大切なのかなあと思いました。

IT化の話ですが、紙媒体でなくても電子書籍で活字に触れている方も多いと思います。子どもたちも見本を読んでいないように思っても、そうしたところで意外と活字に触れています。ただ、それを読書という観点で捉えるのかどうか、これも大人として考えてあげなければならないのではと思います。私もアナログが一番いいと思うのですが、大学でも電子辞書の購入を促す時代です。そういうところへの方策というのも必要ではないでしょうか。

○ 大八木 淳史 委員（ラグビー元日本代表、丸貴管鋼株式会社顧問）



図書館本来の存在意義は、市民に本を読んでもらうためのパブリックサービスだと思うのですが、違う存在意義もあると考えています。

仕事が終わってもすぐに帰宅したくないというサラリーマンの方は結構おられます。そういう方が仕事帰りにどこに行くのかというと飲みに行くわけですが、こうした層を狙って終電時間近くまで開館すれば、終業後の方の図書館利用に繋がったりするのではないかと思います。

また、昨今は第四次産業革命時代と言われる時代ですが、読書の必要性をもっとSNSなどを活用して周知していくことが必要ではないでしょうか。インターネット上には多くの情報が溢れていて、趣味や趣向のあったコミュニティが増えることに繋がっています。広く一般に図書館についてアピールするよりも、そうした趣味や趣向で繋がった限定された小さなコミュニティに向けてアピールするようなことも有効ではないでしょうか。

例えば、村上春樹氏の作品が好きな人が集まったコミュニティに対し「村上春樹特集を実施します」とアピールするなど、そうしたところにも図書館活性化のヒントがあるのではないかと思います。

○ 瀧野 早苗 委員（市民公募委員）



私はこれまで図書館はあまり利用してきませんでした。学校の図書室はよく利用していたのですが、社会人になり子育てをするようになる中で、本は購入して読み、本棚に並べておいてまた読み返すといったことが多くなりました。また、子どもに本に接する機会を与えようという意識もあり、自分が若い頃に読んでいた本なども並べて置いていました。

半径2kmの規定ですが、小平市では自宅の1km圏内に二つの図書館があったせいか、西京区に引っ越して来て、近くの図書館でもそれなりに距離があるように感じています。西京区では区役所近くの西京図書館と洛西図書館が区内の図書館になりますが、一番近い西京図書館でも実際遠くて、なかなか行こうという気持ちになれないのが本心です。

また、図書館が実施するイベントの情報に接する機会も少なく、西京図書館に「大人向けのイベントは何かやっていますか」とうかがっても「特にやっていません」との回答でしたので、図書館を利用するきっかけに欠けているように思います。ですので、近くに住んでおられる方やお子さんを連れたいお母さんなどの常連さんが利用される所になっているのではないかなあと考えています。

今回の議事が図書館についてでしたので、どうすれば自分が図書館を利用するか考えてみました。やはり近くにあることと心惹かれるイベントがあれば身近に感じられるのではないかと思います。

今日初めて右京中央図書館に来させていただいたのですが、こういうワクワクする図書館が近くにあれば良いなと思いました。右京中央などで人気のイベントを西京図書館や各地域図書館でも出張イベントでやってもらえるといいなと思います。また、イベントの開催場所は図書館でなくてもいいのではないかなとも思いました。図書館がある所に来なさいというスタンスでなくてもいいのではないかと。

小平市では3つの分室を含めて11館図書館があり、中学校の数よりも多いくらいでしたので、より図書館を身近に感じられたように思います。

○ 橋元 信一 委員（日本労働組合総連合会京都府連合会会長）



私自身は働き始めてから利用するようになりましたが、働いている人と話しても図書館というキーワードはあまり話題に出てこないですね。

働いている人がどのくらい図書館に行っているのかと思い、私の周りの人に聞いてみましたが、やはりあまり行っていないようです。仕事や子育てで時間が無いとの理由が多いようです。でもこれはこじつけた理由ですね。結局のところ本人に行く気が無い。この質問はお酒を一緒に飲んでる時に聞いたんです。お酒を飲みに行く時間はあるんですよね。これでは働いている人にとって、様々な知識を得る機会を失っていることに繋がるのではないのかなと思います。

若者を対象に調査してみたところ、近頃はスマホを利用したネットからの情報で済ましていることが多いようです。インターネットでの情報検索には「自分が知りたいことしか知ろうとしない」というところがあります。これは私が取り組んでいる分野においても一つの課題であると認識しています。と言いますのは、我々にとって課題になっているのが「若い層にリーダー的な人が現れない」「いても知識的な広がり欠ける人が多い」ということです。

今日、事務局からの説明の中で感銘したのは、図書館の出張サービスで病院などへも出張されていることです。病院で認知症の方に対しても図書サービスを行っているなどは勉強になりました。こうした図書館の取組は私たちも広めていきたいなと思います。

○ 森 清頭 委員（清水寺執事補，上智大学グリーンケア研究所非常勤講師）



親の関心が一番大事なのかなと思います。習慣とは癖ですので、子どもの手の届く所に本があり、よく分かっていない頃から何気に本に触れているという様なところから大事なのではないかと感じています。

我が家にもうすぐ三歳になる子がいますが、よく遊んでいる所にたくさんの本を意図的に置いておくと、興味を示してめくってみようとしています。雑誌であったり、それこそ私の仕事に関する仏教関係の専門書なんかも混ぜているのですが、近場にあると手にするんだなという実感を持った次第です。

やはり本を読むということに対しては、本のおもしろさや知的なものが広がっていくことの楽しさを実感しないと、なかなか興味を持たないのではないかなとすごく感じています。

私の図書館での思い出ですが、中学生の時に先生に図書室で、配架図書ではなく書庫の蔵書図書を見せてもらったことがあり、本が山積しているのを見て圧倒された経験があります。図書館の調べ学習に対する取組で、写真も付け「授業に役立つような図書」として紹介されていますが、とても親切だけれど逆に自分で役立つような本を探し出すということも重要な経験なのではないかと思っています。

例えば、どうすれば目的の図書を探せるのか自分たちで考えてみたり、図書館で司書に聞いてみたり、書架の中から探してみたりする中で、書庫を見せてもらう機会だとか、書架を探すときに目的の書籍とは違うけれど興味を引かれる図書に出会うとかといった経験などのアナログな楽しみかたも学齢期に経験しておくことが、私は経験上必要ではないかと思っています。

今、パソコンなどで何でも調べることが可能です。私たちの世代はアナログからデジタルの境目でしたのでどちらも経験したことがあり、デジタルで得た大量の情報をアナログな方法で裏付けを取るということに抵抗感がなく取り組みます。ですので、アナログな調べ方、経験、知的な広がりというものを広めていくことも必要なのではないかと思っています。それが結局は本に触れ、本を開くきっかけにつながることはないかと思っています。

○ 齊藤 修 議長（株式会社京都新聞ホールディングス顧問）

確かに読まされるよりも能動的に関わっていき、快感を得ることが習慣として身につける最もよい方法ではないかと思っていますね。

○ 榎木 良子 委員（NPO 法人京の美代表）



家の中で家族が何かを読んでいるということが、40代・50代という世代で難しくなっていると思いますので、学校教育の中で読書習慣を付けるための取組が必要なのだと思います。ただ、学校教育の中で行うのであれば、子どもたちにインプットだけでなくアウトプットさせることも大切ではないでしょうか。

本を読み慣れていない子どもからすれば、読書は孤独な世界ですので、自分が読んだ本について「こんなところが面白かった」「こういうところに興味を持った」などディスカッションし、共有することも必要だと思います。そうすることで改めて気づくことや異なる意見、違う視点を取り入れることにもなると思います。また、学齢期の子どもたちは「誰かに聞いてほしい」「評価してほしい」という気持ちがあると思いますので、単に読書をさせるだけでなく

何かを表現させることまで必要ではないかと思います。

また、大学生と話していると、知識が豊富で勉強ができるんだろうなと思うような学生でも、自分自身が何に興味を持っているのかを掴めていない様に感じます。何でもいいので興味を持ち調べてみる事があれば、そこから関連する小説を読んでみたりすることにも繋がり、読書習慣が身につくといったこともあると思うのです。ですので、中高生ぐらいまではその子にとって何か一番響くのか、興味関心を持てるのかということを見つける手助けをしてあげる必要があるのかなと思います。

大学で着物に関する授業をやっていて、学生にテーマを与えて調べに行かせることがあるのですが、積極的に調べてきます。何かテーマやジャンルを持てれば、どんどん興味を持って調べ物や読書に取り組んでいくのだなと実感しています。

私自身は、京都学・歴彩館が近くにありますので、そちらを頻繁に利用させていただいているのですが、アナログの良さというのも実感しています。本屋さんや図書館に行くと、目的の本にたどり着くまでに思いもせず興味を惹かれる本に出会うということがありますので、そういったことも大切ななと思います。

○ 齊藤 修 議長（株式会社京都新聞ホールディングス顧問）

私自身もよくこの図書館を利用しますが、最近では便利になりました。カードと本をカウンターで提示すれば簡単に本を借りられるようになりました。こうした所はデジタルの良さだと思います。一方で、榎木委員が仰られるようにアナログの良さもあり、図書館では両方必要かなと思います。

○ 平尾 和正 委員（市民公募委員）



一口に読書と言っても調べ物と読書活動は根本的に異なる物だと思います。調べ物としての読書は手段としての読書でありインターネットで言えばグーグルなどに該当すると思います。習慣としての読書は中高生にとっては部活動や勉強、友達との付き合いなどインターネットでいうところの LINE や facebook などに当たるものと同列の物だと思います。これら分けてそれぞれ施策を打つべきではないかと思います。

調べ物では圧倒的に早いのはインターネットの活用ですが、アナログの方が深く・広いと言えますので、デジタルとアナログを併用して調べ物をする事が重要ではないでしょうか。

一方、習慣としての読書活動は中高生も忙しくなっている社会の中で読書に時間を割くことは難しくなっています。特に中学時代に読書から離れてしまった子どもに再び読書習慣をつけるには、中高生の興味関心を引くものをダイレクトに提供しなければならないと思います。自らの経験でも、自分に近い本は読みやすいです。自分が実際に関わっていることを題材とした物語であれば、登場人物にも感情移入もしやすいですし、再び本に親しむきっかけになりやすいように思います。

先日、オリンピックが行われていましたが、例えばオリンピックを題材にした書籍をレベルごとに紹介できれば読書習慣としての本に親しむハードルは下がるのではないのでしょうか。

中高生といってもスマホで様々な情報を検索できる社会の中で、興味・関心は細分化されていると思いますし、様々な興味・関心にアプローチをかけていく方法を見つけることが読書習慣としての本に親しむハードルを下げるにつながるのではないかなと思います。

○ 吉川 左紀子 委員（京都大学こころの未来研究センター教授・センター長）

京都市の地域図書館にはそれぞれ地域性があるのではないかと思います。地域によって、図書館を利用する世代や関心のある図書の系統などにどんな特徴があるのかが分かる資料があるといいので



はないかと思いました。

京都は各行政区で地域の性格やそれぞれに持っている魅力なども違います。そうすると図書館に来られる市民も違って、図書館で打ち出す施策も各区で異なるのではと思いますし、地域ごとに図書館にも特色があると面白いなと思っています。

図書館はわざわざ足を運んで来る場所ですので、行ってみたいと思う魅力があるべきだと思います。知識を得るための図書館と、心豊かな時間を持つための図書館の二つの機能があると思いますので、そのどちらに重点を置くのか、どういったニーズに応じていくべきなのかということで各図書館に個性を持たせると京都らしくてよいのではないのでしょうか。

また、図書館を利用される方に高齢者が多いとのことでしたが、どういう風に図書館が持っている機能や魅力を活用すればよいのかということをおぼろしく十分理解できていない場合も多いと思います。この図書館では色々な取組をされておられ、色々な所に様々な情報があります。しかしながら、図書館に来る時には自分が探している本を見つけられるか、自分が知りたいことを調べられるかの二つの目的しか持って来ないと思います。そういう人たちに向けてアドバイザーのような方が利用方法をコンサルティングしてくれれば喜ばれるのではないかと思いました。

中高生の読書活動が減少していることに関連して、聞き取り調査の結果で興味深いものがあります。「気に入った本を友だちに勧めたいか」との問いに6割が「YES」と答えています。つまり、自分の読書経験を友だちと共有したいと考えている子どもたちが結構多くて、一方で「マンガについては友だちと話したくないと思う」との答えが多いことに、思春期の自分の心について「伝えたい」との思いと、「伝えたくない」との思いの微妙な心がうかがえて興味深かったのですが、友だち同士のネットワークで面白いと思った本の情報が伝わっていくのであれば、SNSなどのメディアを使った周知というのも図書館から始めていくのも必要ではないのでしょうか。

○ 齊藤 修 議長（株式会社京都新聞ホールディングス顧問）



図書館は地域における文化のバロメーターではないかなと思っています。文化というと博物館や美術館ということになりがちですが、特定の文化を賞するというのではなく、誰もが無料で自由に利用できる場所であり、そういう施設が私は重要だと思っています。

私は各図書館を回って見たのですが、右京中央図書館は新しく他の図書館と比べて突出していますけれど、他の地域図書館もそれぞれが個性・特色を持ち、それぞれ行ってみたいと思うような図書館づくりを進めていただければいいと思います。

読書の重要さというのは皆さん強調されていましたし、読書習慣をどのようにつけていけばよいかについてもたくさんのご意見がありました。また、読書習慣をつけるために行政に何が求められるかについてもご提案があったと思いますので、今後の取組に生かしていただければと思います。

■ 議 事 一 二 「平成30年度指定都市社会教育委員連絡協議会（川崎市）」への出席者について

配布資料 [平成30年度指定都市社会教育委員連絡協議会（川崎市）](#) [開催概要](#)

■ 報告-1 「京^{みやこ}まなびミーティング」について

配布資料 [京まなびミーティングについて](#)

○ 事務局から（吉川 生涯学習推進課長）

- ・ 今回は京まなびミーティングとして、京都市生涯学習振興財団が発行する京都の文化誌「[創造する市民](#)」において、鈴鹿可奈子委員と京都アスニーの千玄室所長に対談いただきました。一言ご感想等をお願いします。
- ・ また、京まなびミーティングではありませんが、同冊子では園部晋吾委員の「平八茶屋」を紹介する記事も掲載されております。園部委員、ご協力ありがとうございました。
- ・ なお、次回の「京まなびミーティング」は、京都アスニーにて開催される「[ゴールデンエイジアアカデミー](#)」で、「京の食文化」とのテーマに基づき、園部委員、鈴鹿委員にご講演いただく予定です。

○ 鈴鹿 可奈子 委員（株式会社聖護院八ッ橋総本店専務取締役）

社会教育委員としてというよりも色々とお話をお伺いする機会となり楽しい対談でしたが、千玄室所長の「いろんな方に学びの機会を」「いくつになっても学ぶことが大切」とのお考えが強く伝わってくる対談でした。

お伺いしておりますと、奥様が京都市社会教育委員として京都アスニーの創設や一般市民向けの講座開設に関わられたとのことでした。私の身の回りでも、京都アスニーのセミナーが現在の仕事のきっかけとなった友人もいますので、やはり学ぶ場所があることや、何かのきっかけになる場所があるということは大切だと思います。

千所長ご自身も、今でも海外に行っておられるというお話もあり、学ぼうという気持ちがある、いくつになっても前に進んでいこうとする原動力になっているんだなと感じられる対談でした。

■ 報告-2 平成30年度「教育予算（案）の概要」について

配布資料 [教育予算（案）の概要](#)

■ 報告-3 平成30年度「学校教育の重点」について

配布資料 [学校教育の重点](#)

■ 主催事業 及び 刊行物等の案内・説明

○ 事務局（山内 はぐくみ文化創造発信課長）

- ・ 京都市動物園にゾウを寄贈いただいたラオスに中学校建設を進めてきた「象への恩返しプロジェクト」については、千賀委員にも「京都市はぐくみネットワーク」幹事長としてご協力いただきました。過日、校舎の完成報告会を実施し、ラオスの建設地の市長から感謝状の贈呈があったことを報告させていただきます。

○ 千賀 修 委員（平成28年度京都市PTA連絡協議会会長）

3年前から教育や子育てにかかわる団体が休みごとに募金活動に取り組み、約800万円ものご寄付をいただきました。これだけの金額が集まったことにまだまだ世の中捨てたものではないなど実感しました。

学校が完成した際、現地に行ってみりました。ラオスの首都から8時間ほどかかる山中の村

でしたが、現地の子どもたちの笑顔で疲れも飛び、本当にやってよかったなと思いました。

ゾウが動物園に来て3年になりますが、ゾウを見に来ている家族連れを見るたびにうれしく感じますし、引き続きラオスの子どもたちへ恩返しを続けていきたいと思っています。

■ 閉会 [齊藤議長]

■ 閉会挨拶

在田 正秀 京都市教育長から挨拶がありました。